

エッセイ

『食文化の崩壊(2)』

吉田 迪恵

昨夏に、私は思いがけず小さな小さな庭を持つことができた。ご近所の家の庭は皆、おしゃりである。が、我家だけは、昔懐かしい草花やら野菜やらの雑然とした庭となってしまうている。造園業の方が、ステキな庭を造ってあげますよ、と声をかけてくれたが、「自給自足の生活がしたいから、戦時中のように畑にするので」と笑ってお断りしてしまった。今は、ナスとピーマンと大葉が茂っている。それにミョウガも植えてある。つい先日までは菜も葉も食べ切れなかった。野菜作りなど子供の頃手伝っただけの私であるが、これまた何とも楽しい日々なのである。素人の私はただ種をまいただけ、苗を植えただけ状態なのだが、それでも実ってくれるので驚きである。そして何より、おいしいのである。採れたてのピーマンがこんなにも柔らかく甘いとは！無農薬の大葉は最初、虫に食わ

れてしまっていたが、最近ではほとんど繁って虫も食べ切れないうである。訪ねてくる人たちにおみやげに持たせて喜ばれている。前回の『食文化の崩壊』に、「素材そのものがもつ味」を味わうと書いたが、まさにその醍醐味を味わっている。さて、食の楽しみは料理そのものだけだろうか。和食のすばらしさの一つに器との調和があると思う。日本の食文化は芸術そのもの、雅びな世界である。かつて、上海の知人夫婦が来日中、何度かお招きしてホームパーティーを開いた。奥様は、日本の食は何て器がステキなの！といつも喜んでくださったものである。ところが、先日また当研究所のメンバーから、耳を疑うような話を聞かされてしまった。彼女は、友人夫婦から夕食におよばれされたそうである。冷奴は。パックのまま、薬味とし

ようゆをかけて食べさせられたという。また、スーパーのお惣菜がパックのまま出てきて、値段の付いたラップをはずし、皆でつついて食べたそうである。彼女はあまりのことに、駅まで送ってくださったご主人に、「ちょっと、あんな手抜きのお惣菜で大丈夫なの！」と、遠慮なく言ってしまったそうである。「わざわざ器に移しかえる手間が省けていいんじゃないの？ 自分の母親もそうだったよ、何かおかしいか？」返ってきた答えは以上だったという。「あー、夫婦ってこのように価値観が一緒なら、仲良く平和に暮らせるのか・・・理想的夫婦仲の良さ！ でも私は、彼ら夫婦みたいに息の合う人と結婚できるかしら」と、その夜は朝まで眠りにつかなかったそうである。この話題で盛り上がっていると、

学校教師のK子氏もコメントしてきた。

「学校給食でも、冷奴はパックのままですよ。真ん中をくぼませ、そこにおしよゆを入れて食べさせているんですよ」

何たること。

私は、頭をガンと一発殴られた思いがしたのである。

日本の食文化が壊れていく。

家庭でも、学校でも・・・。

まるでエサを食べるようなものではないか。日本人は一体いつから野獣のようになり下がってしまったのか。

ただ合理的でありさえすれば良いのだろうか。

感性の豊かさなどというものはもう必要ないのだろうか。

学校給食は、戦後日本人皆が物質的に貧しかった時に始まった。

しかし現代は、物が貧しいからではない。心が貧しい日本人が増えているから、それを補うために、存在価値があるのだろうか。

家庭が悪いのか、学校教育が悪いから家庭も悪くなるのか。

とにもかくにも、日本の食文化は限りなく崩壊しつつある。

# イワクラ学会会報